

幼児の心身発達と環境（後）

—運動能力・社会適応を中心として—

奥平洋子・星 永



研究結果と考察

結果を分析する順序としては、一、今回の運動能力テスト結果を全国平均と比較し、この保育園における運動発達の姿をみる。
二、運動能力と社会適応性など各要因間の相関分析を行なう。
三、各要因の働き合いをふまえた上で、一人一人の子どもの全体像を把握し、保育の方向付けを行なうための事例研究を行なう。

一 運動能力テスト結果

運動能力の発達をみるには、各種目別テスト結果を年齢別平均値に整理し、これを全国平均値と比較するとよいが、今回は被験児が少ないので、園児全体の五段階値分布を調べ、これを全国平均分布と比較し、本保育園児の発達傾向をみた。

(一) 体支持持続時間

図1(イ)にみるように、段階2が40%、3が36%を占め、段階4、5の占める比率が低い。つまり、分布が全国平均より低い段階にずれており、したがって、本保育園の子どもは相対的にみて、腕・肩の筋持久力や精神的ながんばりにおいては劣っているように思われる。

(二) 立ち幅とび

図1(ロ)にみるように、平均水準3を示す子どもが約50%を占め、4、5がやや少なく、2が若干多い。非常によい子、わるい子が少ないという姿を示す。一気に強い筋力を出し、瞬発力が関与するこの運動では、ほぼ平均的な発達を示しているといつてよいだろう。

(三) ソフトボール投げ

図1(ハ)にみるように、段階3が67%と全体の三分の二を占めている。段階5と段階1を示すものはほとんどなく、段階4も少ない。全体として立ち幅とびと同じような分布型を示している。この運動には瞬発力と調節力が関与するが、これらはほぼ平均的な発達を示しているといえよう。

(四) 両足連続とび越し

図1(ニ)に示すように、段階4が全体の40%を占め、段階5と3が約30%を示すのでこれではほぼ100%となる。1、2はほとんどなく、分布の山は完全に一段階高い方にずれている。これは、図1(イ)にみられる体支持持続時間の分布と対照的な姿を示している。この運動には主として全身の調整力や敏捷性が関与しているが、これらはよく発達しているとみてよいだろう。

(五) 二十五メートル走

図1(ホ)に示すように、ほとんどの子どもが段階3と4にあり、1、2、5の段階は少ない。走力は日常のあそびに含まれる基本的運動の一つであるが、この保育園の子どもたちは全般的にみてかなりよく発達しているとみられる。

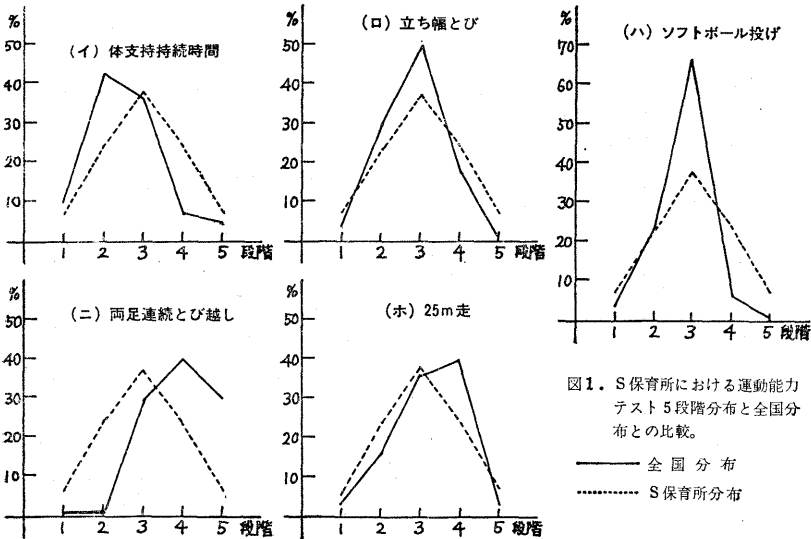


図1. S保育所における運動能力テスト5段階分布と全国分布との比較。

— 全国分布
- - - S保育所分布

格		因子別行動評定					体位(4段階)			両親の運動的要因						食事(3)		帰宅後の遊び		
情緒安定	気質安定	慎重	自己主張	創造性	社会活動性	的感覚運動	身長	体重	胸(カウプ)	機能(5)		経験(有0)		興味(有0)		牛乳	肉食	家の内・外	(4)熱中度	親の許可(4)
										父	母	父	母	父	母					
B	B	B	B	A	A	A	1	1	4③	3	3	X	0	0	0	3	3	半	4	3
E	C	E	C	E	D	E	1	1	2①	5	4	0	0	0	0	3	3	半	4	4
A	C	C	C	B	B	C	3	4	4③	3	3					3	3	外	3	4
C	D	C	C	C	D	D	2	4	4③	3	3	0	0	0	0	3	1	外	4	3
B	B	A	D	A	A	A	4	4	4②	4	1	X	X	0	X	3	3	外	4	3
C	A	B	D	B	B	C	3	4	4③	5	5	0	0	0	0	3	3	外	4	2
A	A	A	B	A	A	A	3	2	2③		2					3	2	半	4	2
E	D	D	B	E	C	B	3	4	3②		3		X		X	2	2	半	3	3
B	A	C	D	C	B	C	4	4	4③	3	3	0	0	0	0	3	2	内	3	2
E	C	C	B	B	A	D	1	2	4③	3	4	0	0	0	0	3	2	外	4	3
D	D	E	B	E	C	E	1	2	4③	3	3	0	0	0	0	3	2	外	3	3
A	E	E	C	A	B	C	4	4	4③	4	3	0	X	0	X	3	2	外	3	2
E	D	D	C	C	E	A	3	2	4①	4	4	X	0	0	0	2	3	半	3	3
C	B	B	A	C	A	A	3	3	4③	3	3	X	X	X	0	2	1	外	4	4
E	D	E	A	A	A	A	2	3	4③	1	2	X	X	0	0	3	3	外	3	3
D	3	B	E	D	D	D	1	1	4②	4	2	0	X	0	X	2	2	外	3	3
A	D	D	C	D	D	E	1	2	3③	3	2	X	X	0	0	2	2	半	4	4
B	A	A	D	C	C	A	2	1	4①	5	5	0	0	0	0	3	3	内	4	2
A	A	A	C	A	B	C	1	2	4③	3	2	X	X	0	X	2	2	半	4	3
E	E	E	A	C	B	D	4	4	4③	3	3		0		0	3	3	半	4	4
D	C	B	D	C	C	C	4	4	4③	4	2	X	X	0	0	2	2	半	3	3
A	C	B	D	B	C	B	1	2	3③	3	3	X	X	0	X	2	2	内	3	2
D	B	D	A	E	C	C	2	4	4③	3	3	X	X	X	X	3	2	外	2	2
D	C	C	D	E	E	E	2	1	1①	3	3	0	X	X	0	2	2	外	3	3
B	B	D	E	C	E	D	1	1	3②	3	1	X	X	0	X	2	2	内	3	2
B	E	E	E	B	E	B	1	1	4③	5	3	0	X	0	X	3	2	内	1	2
B	E	C	E	D	D	E	2	4	4③	5	3	0	0	0	0	2	2	外	4	2
E	C	C	A	D	C	A	4	4	4③	4	3	0	0	0	X	2	2	内	3	1
C	D	B	E	B	D	B	1	1	2③	3	3					3	1	外	4	2
C	A	A	D	E	E	B	1	1	1①	3	3	0	X	X	0	3	2	内	3	2

表 1. 各要因別個別資料

児童名	生活年齢	同胞構成	I、Q	運動能力テスト (5段階)						基本動作			身辺自立度	社会適応	性
				持続時間	立巾跳	ソフト投げ	連続跳足	25m走	合計	安歩行	器手先の	安歩行			
Y (ケ-スA)	4:3	WWⓂ	110	5	3	3	5	4	20	4	4	5	A	A	
R (ケ-スB)	4:11	ⓂM	127	3	4	3	5	4	19	2	4	2	E	E	
M (ケ-スC)	3:9	MⓂ	111	4	3	3	5	4	19	4	4	3	A	A	
K	4:4	ⓂW	100	3	4	3	5	4	19	3	2	3	D	B	
R (ケ-スD)	4:2	WⓂ	112	2	3	4	5	5	19	5	4	5	B	B	
M	4:5	ⓂMM	111	3	3	3	5	4	18	5	5	3	B	C	
Y	6:3	Ⓜ	104	3	4	3	4	3	17	5	5	5	A	A	
S	4:9	ⓂM	105	3	2	3	5	4	17	1	1	1	D	C	
H	5:10	ⓂW	114	3	3	4	4	3	17	4	4	2	A	B	
U	4:11	MⓂ	122	2	4	3	4	4	17	5	3	4	B	A	
M	3:9	ⓂM	111	3	4	3	4	3	17	3	3	2	B	B	
K	5:10	MⓂM	100	2	3	3	4	4	16	5	4	1	B	A	
M	3:10	WⓂ	113	4	2	2	5	3	16	2	3	1	E	E	
F	5:5	WWⓂ	115	2	3	3	4	4	16	5	5	4	C	B	
H	5:11	WMⓂ	113	3	3	3	4	2	15	5	4	4	A	A	
H	5:8	WⓂ	118	2	3	3	4	3	15	2	1	3	E	D	
S	5:3	MⓂM	105	3	2	3	4	3	15	4	2	2	C	C	
Y	5:10	WⓂ	100	2	3	2	4	4	15	3	3	4	A	C	
M	5:1	MⓂ	128	3	3	3	4	2	15	4	4	5	B	C	
Y	5:7	MⓂ	108	2	2	3	3	4	14	3	2	2	C	B	
T	5:6	ⓂM	103	2	2	3	3	4	14	2	2	4	B	C	
Y	3:10	ⓂM	123	3	3	3	3	2	14	1	3	2	C	C	
M	4:0	ⓂWW	113	2	3	3	3	3	14	2	2	2	D	C	
M (ケ-スE)	5:4	MⓂ	103	2	3	2	3	3	14	3	3	3	D	E	
T (ケ-スG)	5:2	ⓂM	121	2	2	2	3	3	12	1	1	1	D	D	
U	4:5	MMⓂ	102	1	2	2	5	2	12	1	1	1	E	D	
S	4:0	ⓂM	117	2	1	2	4	3	12	2	1	2	C	C	
N (ケ-スH)	4:1	ⓂM	110	1	2	3	3	3	12	3	2	3	D	D	
K	6:4	Ⓜ	90	2	3	2	3	1	11	1	5	2	D	D	
R (ケ-スF)	5:4	MⓂ	113	1	2	1	3	2	9	3	5	5	D	E	

以上の五種目の結果を検討すると、跳ぶ、走る、投げるなど基本的運動はほぼ平均的な発達を示している。特徴としては、体支持続時間のような腕・肩の筋持久力、及び精神的がんばり・粘り強さを要する種目は劣っている。反面全身の調整力や敏捷性を要する両足連続とび越し、筋力や神経系の働き・瞬発力を要する二十五メートル走がすぐれている。これは北礼子氏が行なつた東京中野区の幼稚園児の結果とよく似ており、狭い空間で遊ぶ経験が多いことから、調節力(身のこなし)や敏捷性は発達するが、自然の環境で木登りをしたり、長時間走りまわったりといった運動経験が乏しく、筋持久力や粘りが育ちににくい結果ではないかと解釈される。つまり、都市型の生活環境を反映する運動能力の発達を示すとみられ、今後この面を考慮した体育指導を行なうことが望まれる。

二 各要因間相互分析

運動能力を中心として、保育場面でみられる社会適応性やその他の要因間の関連をみるため、各資料を整理し、運動能力テスト得点の高い者から順次並べ、表1のような一覧表を作成した。これをみると、一人一人の子どもについて、各要因の働き方は実にさまざまである。運動能力のよい子必ずしも社会適応得点が高い

とは限らない。にもかかわらず表をよくみると、運動能力の高い子どもの方に、低い子どもにおけるよりも、社会適応得点の高い子が多く含まれているのに気づく。また母親の運動要因や帰宅後の遊び要因と、運動能力の間にも一定の傾向が存在するようである。そこでこれを統計的に確定するため、相関分析を行ない、相関係数を算出した。(相関係数 r とは片方が高い時は必ずしも一方も高いということ、 0 は全く関係なしということ、数値はその間で示される。マイナスは逆の相関を示す。なお一部を除き、 ϕ 相関係数を用い、有意性はカイ自乗にて検定した。危険率は P で示す)

(一) 運動能力と社会適応性との関係

(i) 方法二(注・前回掲載分参照)の保育者による社会適応性評定得点を集計し、順位をつけ、これと表1にある運動能力テスト合計点の順位を用い、 Kendall's τ の順位相関を算出し

表2 運動能力と性格評定

性格因子	運動能力	運動能力テスト		ϕ 相関係数 及び危険率(P)
		高	低	
社会活動性	高	11名	3名	$\phi = 0.621$ ($\chi^2 = 11.552$) ($P < .01$)
	低	3	13	
情緒安定性	高	7	12	$\phi = -0.259$ ($\chi^2 = 2.010$) ($P < .20$)
	低	7	4	
気質安定性	高	7	7	$\phi = 0.062$ 有意差なし (N.S.)
	低	7	9	

たところ、 $Pr = 0.395$ であった。運動能力の高い子どもは、社会適応でも高い得点を示す傾向があるといえる。

(ii) 方法二(三)の保育者による性格評定得点を集計し、(a)社会活動性、(b)情緒安定性、(c)気質安定性別に運動能力との相関をみた。この場合順位相関をみると結び(同点)が多いので、中央値で両資料を分割し、 2×2 分割表による ϕ 相関係数を用いた。(以下の相関分析はすべてこの方法による) その結果は表2の通りで、運動能力と社会活動性とは 0.621 の高い相関を示す。情緒の安定性とは統計的に有意ではないが、傾向としては逆の相関を示している。

(iv) 方法二(三)の保育者による因子別幼児行動評定を集計し、(a)慎重さ、(b)自己主張、(c)創造性、(d)社会活動性、(e)感覚運動的活動別に運動能力との相関をみた。表3にみるように、幼児の行動を因子別にみると、自己主張と運動能力との相関が 0.535 とかなり高くみられ、次いで社会活動性が 0.339 の相関を示している。慎重さ、創造性、感覚運動的活動では有意な相関はない。

以上三つの評定を通じていえることは、運動能力は子どもの活動の個人的側面より、対人的・社会的側面と関連を持っていることが示されており、集団の中での活動水準、適応水準の高さと関連するといえよう。

(二) 運動能力と知能との関係

今回の研究では、鈴木ビネー知能検査を実施し、知能指数と運動能力テスト結果の相関をみたが、有意な関係が見出されなかった。これは、(1)知能を構成する因子も単一でなく、記憶、判断、推理、言語、操作等多くの因子を含むので、単一IQでみるより、行動評定で行なったようにこれらの知能因子毎にみる必要があるのではないか、(2)鈴木ビネー法は言語性検査が多いので、幼児の場合もつと動作性を含むものの方がよいのではないか、などが反省された。例えばWPPSI(ウェクスラー幼児用知能検査)を用いるとか、特に設計した課題を用いるなど今後検討を行なう要があり、今の段階では両者に相関がないといい切れることは早計であらう。

表3 運動能力と因子別行動評定

因子別行動	運動能力	運動能力テスト		ϕ 相関係数 及び検定率(P)
		高	低	
慎重さ	高	7名	9名	N.S.
	低	7	7	
自己主張	高	11	4	$\phi = 0.535$ ($\chi^2 = 8.57$) ($P < .01$)
	低	3	12	
創造性	高	8	7	N.S.
	低	6	9	
社会活動性	高	10	6	$\phi = 0.339$ ($\chi^2 = 3.453$) ($P < .10$)
	低	4	10	
感覚運動的活動	高	8	7	$\phi = 0.134$ (N.S.)
	低	6	9	

(三) 運動能力と日常的基本動作との関係

5)。

日常的の基本動作は、歩行の安定と手先の器用さに分け、各グループで個人別に相対評価を行ない、この結果と運動能力との相関をみた。表4にみるように、歩行が安定していること及び手先の器用さは、そのそれぞれについてみても、或いは両要因を併せても(0.464)運動能力との間かなりの相関がみられる。つまり、運動能力は歩行や手先の運動など日常的基本動作がしっかり身につけていることと相関しており、日常経験の重要性が示唆される。なお歩行の安定と手先の器用さの相関は0.659であった(表5)。

表4 運動能力と基本動作

基本動作	運動能力		φ係数
	高	低	
歩行の安定	高	9名	0.464 ($P<0.02$)
	低	5	
手先の器用さ	高	9	0.396 ($P<0.05$)
	低	5	
歩行の安定 + 手先の器用さ	高	9	0.464 ($P<0.02$)
	低	5	

表5 歩行の安定と手先の器用さ

		歩行の安定度		φ係数
		高	低	
手先の器用さ	高	10名	2名	0.659 ($P<0.01$)
	低	3	15	

表6 日常的基本動作と
身辺自立・社会適応性

		基本動作		φ係数
		高	低	
身辺自立	高	10	6	0.491 ($P<0.01$)
	低	2	12	
社会適応性	高	10	5	0.544 ($P<0.01$)
	低	2	13	

表7 相互の関係

	運動能力	基本動作	身辺自立
基本動作	$\phi = 0.464$		
身辺自立	N.S.	$\phi = 0.491$ ($P<0.01$)	
社会適応	$R = 0.444$ $\phi = 0.267$	$\phi = 0.544$ ($P<0.01$)	$\phi = 0.267$ ($P<0.20$)

(4) 日常的基本動作と身辺自立度、社会適応性との関係
運動能力の基礎に日常的基本動作があることがわかったが、身辺自立や社会適応性との関係はどうであろうか。
身辺自立度をグループ内相対評価し、基本的動作との関係を見ると、表6のようになる。歩行の安定や手先の器用さは身辺自立に役立ち(0.491)、社会適応にも促進的な働きを示している(0.544)といえよう。
以上みてきた運動能力、日常的基本動作、身辺自立度、社会適応性(方法二)による)についての相互の関係をみると表7のようである。これらは相互に関連し合
い、互いに促進的な作用を持っていると考

表8 父の運動要因と
子どもの運動能力

父	子ども運動能力		φ係数
	高	低	
運動機能	高	5 6	N. S.
	低	7 9	
運動経験	高	7 7	N. S.
	低	4 7	
運動への 興味	高	10 11	N. S.
	低	1 3	
三要因合算	高	8 6	0.299 (P<.20)
	低	3 8	

表9 母の運動要因と
子どもの運動能力

母	子ども運動能力		φ係数
	高	低	
運動機能	高	12 10	0.262 (P<.20)
	低	2 6	
運動経験	高	8 4	0.400 (P<.05)
	低	4 11	
運動への 興味	高	9 8	0.227 N. S.
	低	3 7	
三要因合算	高	8 2	0.537 (P<.01)
	低	4 12	

表10 運動能力と食事、
体格の関係

		運動能力		φ係数
		高	低	
肉食	多	6	3	0.263 (P<.20)
	少	8	13	
牛乳	多	11	7	0.355 (P<.10)
	少	3	9	
肉食+牛乳	多	11	6	0.413 (P<.05)
	少	3	10	
体格	多	8	6	0.196 (N. S.)
	少	6	10	

		体格		φ係数
		良	不良	
肉食	多	5	4	0.134 (N. S.)
	少	9	12	

両親の運動的要因は、遺伝的素質として、また運動環境をつくる人として、両面から子どもの運動能力に影響を与えると考えられるが、表8、9のように、父の運動要因には有意なものはないが、母には有意な相関があり、特に運動経験をもつことの相関が高い(0.400)。これは幼児の場合運動機能そのものがまだ充分

関がある(0.413)。運動能力の高いことと体格のよいことは、関連する傾向は認められるが有意ではない。肉食が多いことと体格のよいこととの関係も0.134で有意ではないが、傾向としては認められる。運動能力の高い子は活動量が多く、エネルギー消費との関係が高いと考えてよいであろう。

えてよいであろう。
(四) 運動能力に影響する要因(生育歴・環境調査)
次に運動能力の発達に関係をもつものとして、両親の運動要因(遺伝・環境要因として)、本人の食事の好みや体格、帰宅後の遊び要因との関係を分析する。

(イ) 両親の運動機能・運動経験(選手経験)・運動への興味と子どもの運動能力との関係
両親の運動的要因は、遺伝的素質として、また運動環境をつくる人として、両面から子どもの運動能力に影響を与えると考えられるが、表8、9のように、父の運動要因には有意なものはないが、母には有意な相関があり、特に運動経験をもつことの相関が高い(0.400)。これは幼児の場合運動機能そのものがまだ充分

(ロ) 運動能力と食事、運動能力と体格、食事と体格の関係

(ハ) 帰宅後のあそび要因との関係

〈遊び場所と運動能力〉 帰宅後主に外あそびが多いか、半々位か、または内あそびが多いかということ、運動能力との関係を見る。表11のように、内あそびを主とするものに運動能力の低い子どもが多い(0.360)。

なお「外あそびが多い」と答えたもののあそびの種類をみると、自転車、ボールあそび、砂あそび、野球など身体活動的なものが多いのに、「内あそびが多い」と答えたものでは、ミニカー、積木、ブロック、お人形、ままごとあそびなど静的なあそびが多く、内あそびが主となる子どもの方が、運動能力の発達が劣ることは当然予測されるところである。

〈その他のあそび要因との関連〉 母親が外あそびをしむけるかどうか、一人で遊びにゆく範囲の許容度が高いかどうか、友だちあそびを喜んでするかどうか、ということ、運動能力をみると、表11のように、これらの要因の高いこ

表11 運動能力と帰宅後のあそび要因

		運動能力				χ ² 係数
		良	やや良	やや不良	不良	
あそび場所	外あそび	4	4	3	3	0.360
	半々位	2	3	4	0	P<.10
	内あそび	0	1	2	4	
その他のあそび要因	外あそびを好む傾向大	5	5	5	2	0.355
	外あそびを好む傾向小	1	2	4	5	P<.10

と運動能力が高いことは0.05の相関がある。友だちとあそぶ機会を持ち、外で友だちあそびに熱中することは、運動能力を高める働きをもつようである。

〈遊び場所と体格〉 表12にみるように、

外あそびを主とするものに体格のよい子どもが多く(0.330)、内・外半分位とするものと内あそびを主とするものに相対的にみて体格のよくないものが多い。子どもの身体発育にとって、外あそびは重要な働きをもつといえよう。

運動能力、食事、体格、遊び場所についての相互の関係をみると、表13のようである。これらは相互に関連し合い、互いに促進的な働きを持っているとみてよいであろう。

以上運動能力に影響を与える要因をみてきたが、両親特に母親の運動への志向性、外あそびをしむけ、これを許す態度はプラスの影響を持つこと、また子どもの行動で

表12 あそび場所と体格

あそび場所	体格良	不良
外あそび	9	5
半々	3	6
内あそび	2	5

表13 相互関係

	食 事	運動能力	体 格
運動能力	$\phi=0.413$ (P<.05)		
体 格	$\phi=0.134$ (N.S.)	$\phi=0.196$ (N.S.)	
外あそび	N. S.	$\phi=0.360$ (P<.10)	$\phi=0.330$ (P<.10)

みると、充分な外での友だちあそびを経験している者に運動能力が高い傾向が認められるといつていいであろう。

(六) 養育態度の影響

養育態度は、保護、統制、家庭の雰囲気、父の参加度の四つに分けて集計したが、ここではⅠ保護的因子、Ⅱ統制的因子と、運動能力、社会適応との関係をみる。

(a) 保護的因子と運動能力には相関はなく、統制的因子と運動能力では、統制が強くなると運動能力が低くなるという負の相関が、有意ではないが傾向として認められた。

(b) 保育者による三種の行動評定と、養育態度との関係を見ると表14の通りである。

保護的因子が高い、つまり過保護傾向があると、社会活動性(Ⅰ0.336)及び創造性(Ⅰ0.401)が乏しく、統制的因子が高いと自己主張(Ⅰ0.467)が弱く、社会活動性(Ⅰ0.401)が乏しい。また情緒的安定(情動的傾向の抑制)傾向(0.349)がある。

養育態度は直接運動に影響する面もあるが、むしろ保護と統制の働きにより、適応行動全体を通じて間接的に、運動能力にも影響しているとみてよいであろう。適度な愛情ある

表14 養育態度と子どもの行動評定

養育態度 行動評定		Ⅰ 保護的因子			Ⅱ 統制的因子		
		高	低	φ係数	高	低	φ係数
(i) 社会適応性	高	5	10	-0.267 (P<.20)	8	7	N. S.
	低	9	6		7	8	
(ii) 性格評定	社会活動性	高	4	-0.339 (P<.10)	5	9	-0.277 (N. S.)
		低	10		10	6	
	情緒安定性	高	9	N. S.	12	7	0.346 (P<.10)
		低	5		3	8	
	気質安定性	高	7	N. S.	6	8	N. S.
		低	7		9	7	
(iii) 因子別行動評定	慎重さ	高	8	N. S.	8	8	N. S.
		低	6		7	7	
	自己主張	高	5	N. S.	4	11	-0.467 (P<.02)
		低	8		11	4	
	創造性	高	4	-0.401 (P<.05)	9	6	N. S.
		低	10		6	9	
	社会活動性	高	5	-0.330 (P<.10)	5	11	-0.401 (P<.05)
		低	9		10	4	
	感覚運動的活動	高	8	N. S.	8	7	N. S.
		低	6		7	8	

接触と、強制的ではないがリズムある生活が運動能力の発達にも大切であるといえよう。

三 事例研究

以上の各要因の相互分析をふまえ、一人一人の子どもにつき、日常保育場面や体育指導の時の行動観察もまじえて事例研究を行ない、その中から今後の保育の方向を検討した。全部につき述べ

られないので、運動能力テスト結果の高いグループ及び低いグループの各四名ずつにつき、事例研究の概要を述べる。(表1参照)

(一) 運動能力得点の高い事例

ケースA児(四歳三か月 男) 運動能力得点20

A児はこの研究対象の中で最も運動能力に優れており、なかでも体支持持続時間(得点5)に示されるがんばりや、両足連続とび越し(得点5)にみられる優れた敏捷性を身につけている。行動評定によると社会適応性がよく、これを因子別にみると、社会活動性、創造性、感覚運動的活動(各得点A)が優れている。保育場面における行動は自立的で、積極的に何事にも取り組む、がんばりやであると観察されている。両親の運動要因をみると、運動機能は普通だが父母とも興味を持ち、加えて母には運動経験があるなど、プラス要因が多い。帰宅後のあそびは、屋外・屋内半々だが、友だちとの外あそびには高い熱中度を示す。牛乳・肉食を好む。両親の養育態度は、気持ちは充分受け入れている一方、生活のきまりはきちんとしており、情緒の安定と自立への援助がなされている。これらが相関連しながらA児の社会適応性をたかめ、がんばりや敏捷性にすぐれた運動適応を発達させているとみられる。

ケースB児(四歳十一か月 男) 運動能力得点19

ケースAにつき、全体的に運動能力のよいB児であるが、内容的にみると、敏捷性や全身の調節力を要する両足連続とび越し(得点5)はすぐれているが、筋持久力や精神的ながんばりが必要とする体支持持続時間は(得点3)相対的に低い。この状況はどこから生ずるのだろうか。B児の場合両親の勤務地が遠いため、二重保育され、両親と過ごす時間が短かく、暖かい接触や対話が少ない。行動評定では全般に社会適応性が低く、情緒不安定で慎重さに欠け、創造性も乏しい(各得点E)。日常の保育場面をみると、好きなことには熱中するが、みんなと一緒に行動ではさっと動けず、ふうふうした行動が多い。このような行動特徴が運動面にもあらわれているとみてよいであろう。また本児の示す高い運動能力は両親の運動要因、すなわち父母とも運動機能がよく、経験や興味を持っており、遺伝・環境的にプラス要因になっていること及び、二重保育先の家庭で小学二年生の男児とよくあそび、場所は屋外・屋内の半々であるが、家の中であそぶ場合にも、この男児と押し入れから飛び降りるなどの身体的活動を活発に行ない、本児の素質を経験の中で充分伸ばしていることによると思われる。

したがってB児については、運動面の指導というよりは、情緒

の安定や社会適応上の援助が大切であると考えられるので、家庭での接触についての両親との話し合いや、日常の保育活動を通して、もっと積極的自発的に集団内の活動が展開できるよう援助しようとの方向付けが行なわれた。

ケースC児（三歳九か月 男）運動能力得点19

帰宅後は主に外であそび、一週間あたりの外あそび時間は他児にくらべてかなり多い。運動能力テストでは、体支持・持続時間（得点4）、両足連続とび越し（得点5）、二十五メートル走（得点4）など、敏捷性や筋力にすぐれており、運動量の多いことがその背景になっていると考えられる。反面両親の養育態度には、やや接触が乏しく放任傾向がみられるが、これらは、相対的に自己主張が乏しく（得点C）、気質安定性、慎重さ、感覚運動的活動（各得点C）など安定した個人活動がやや苦手であるなどの特徴を構成しているようである。

ケースD児（四歳二か月 女）運動能力得点19

D児は女子の中でも最も運動能力がよく、特に両足連続とび越し、二十五メートル走（各得点5）など敏捷性、身のこなし、つまり調整力がある。園での運動あそびでも、鉄棒やたいこ橋を器用にこなし、女の子としては活発な活動を展開している。このDの背景をみると、帰宅後の外あそび時間も多く、姉や近所の子と

もとボールあそびなどでよくあそぶ。その熱中度も高い。反面、園では着がえのおそい子を手伝ったりするおしやまでお姉さんの行動もみられる。家庭では行動の制限が少なく、のびのびした扱いをしている。

(二) 運動能力得点の低い事例

ケースE児（五歳四か月 男）運動能力得点13

ケースF児（五歳四か月 女）運動能力得点9

二卵性双生児であるEとFは二人共、やや神経質、虚弱な体質で休みが多い。また身体も小さく細い。両親とくに母親の養育態度は過保護傾向が強く、統制は弱い。このため社会適応性が低く（各得点D）、創造性（各得点E）、社会活動性（各得点E）が低い。しかし感覚運動的活動ではE児は低いが、Fは高く（得点B）、基本的動作のうち手先の器用さがよい（得点5）ことと関連し、Fの特徴となっている。Fは日常の保育場面でも、活発な運動あそびをあまり好まず、みんなから離れて砂あそびなどの静的なあそびが多い。運動能力は二人共、体支持・持続時間（Eは得点2、Fは得点1）、ソフトボール投げ（Eが得点2、Fが得点1）が劣り、筋力と精神的ながんばりが少ないと思われる。二人を比較すると、Eの方が運動面でややよいが、これはEの帰宅後

の外あそびの時間が多いのにくらべて、Fは折り紙やお人形さんごっこなどのあそびが多く、外あそびをほとんどしないことが影響しており、Eが身体運動でやや上、Fが感覚運動的活動や手先の器用さでやや上という特徴を構成しているものとみてよいであろう。

このケースについては、身体を丈夫にし、身体活動を多くしていくことによって運動能力・社会適応性共に伸ばす方向づけが必要である。

ケースG児（五歳二か月 男）運動能力得点12

日常の保育場面では目立たず、表情の乏しいGは運動場面でもその場に合った動きができず、まごつくことが多い。運動能力をみると跳ぶ、投げるなどの基本的な動作にも自信がなく、運動場面に取り組む積極性に欠けている。一方、知能検査では、高い知能指数(121)をあらわし、決して場面や課題の理解ができないわけではない。このGの生育歴・家庭環境をみると、両親ともに運動経験・興味がなく、特に母は運動が苦手なこともあり、外あそびをしむけることが少ない。Gはもっぱら帰宅後は、家の中で積木やブロックあそびをしたり、テレビをみることが多い。養育態度はきびしく干渉的でのびのびした行動を妨げているようであり、むしろこうした環境因子からくる経験不足や、自信・自発性

の乏しさが影響しているように思われる。

戸外での友だちあそびを活発にし、家庭での接し方を考えていけば、Gの持っている力をもっと発揮できるのではないかと思われる。

ケースH児（四歳一か月 女）運動能力得点12

H児は身体は大きい、走ったり、跳んだり、投げたりの基本動作がぎこちなく、道具をいじったりするのも不器用である。運動能力でみると、体支持持続時間(得点1)をはじめ全般に低く、力の入れ方や協応性など運動をまとめる調整力が乏しい。弟との二人姉弟であるが、Hを溺愛する母からお人形さんのように大事に扱われ、小さい時から家の中でお人形あそびやまごとしかせてもらえなかった入園前の環境が影響していると思われる。

おわりに

運動能力から出発した研究であるが、幼児の心身発達はそれぞれ単独に発達するものでなく、互いに関連しながら環境の中で育つという考え方のもとに、背景にある要因をおさえながら研究を行なってきた。その結果、幼児の運動場面にみられる適応力は、幼児の生活の中で重要な位置を占め、社会適応にも密接に関連す

ること、その発達には遊び環境や両親の態度など多くのことが関与していることがわかった。また都市化された環境に育つこの保育園児全体の傾向として、連続とび越しのような運動はよくできるが、体支持など持久性やがんばりを要する運動は劣るなど、きこころ狭隘な生活環境や経験が幼児の発達に影響することもわかった。今後大人の責任として、保育の実践の中で考えていかねばならぬ問題であり、そのためにも、遊びや環境をもつてと掘り下げ、運動のみでなく、情緒や社会性の発達についても考えていきたいと考える。これを機会に他の地域での研究もお教えいただき、ご意見やご示唆がいただけたらと心から願っている。

(埼玉県立厚生保育専門学院)

注1 John M. Dignan; Principal dimensions of child Personality as interred from teacher's judgement. Child Dev., 1963 34, 43—60

注2 飯島婦佐子「幼児行動評定作製のための試み」日本心理学会第三十九回大会発表論文

文集

注3 「体育の科学」二十六巻四号一九七六年 二四九頁—二五二頁
(注1、2は前号掲載分です)



幼児の教育 第七十六巻第一号

一月号 ◎ 定価二〇〇円

昭和五十一年十二月二十五日印刷
昭和五十二年一月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発売所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発行所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレイベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。